

楊陽主編

中国的東北社会（十四—十七世紀）

山根 幸夫

本書の主編者楊陽氏は、東北師範大学歴史系を卒業した後、吉林省社会科学院歴史研究所に奉職、現在同所の研究員で、明清史研究室の主任である。楊氏には『明代奴兒干都司及其衛所研究』（主編）、『明代遼東都司』、『東北民族史略』（合作）、『曹廷傑与永寧寺碑』（合作）、『沙俄与東北』（合作）等の著書がある。本書も楊氏の主編に係る明代東北社会史である。先ず、本書の目次を紹介しておく。

- 上篇 封建社会後期中国東北社会的深刻変化（一三九六—一四三五）
- 第一章 明洪武朝对東北的統一与遼東都司設置
 - 第二章 明代流人在東北
 - 第三章 明代初期遼東的經濟（孫与常）
 - 第四章 明永樂・宣德朝对東北統治加強、奴兒干都司設立
 - 第五章 明代東北的驛站

- 第六章 明初奴兒干都司轄境女真社会經濟
中篇 明王朝的腐敗和東北社会的大動蕩（一四三六—一五二一）
 - 第七章 海西女真南遷和奴兒干都司轄境衛所統建以及遼東辺牆的修築
 - 第八章 明代中期遼東經濟
 - 第九章 明代中期奴兒干都司轄境女真社会經濟形態
 - 第十章 明代東北民族（傅朗雲）
下篇 滿族的崛起与東北統治的更替（一五二一—一六四四）
 - 第十一章 明朝繼續加強統治挽救政治危機
 - 第十二章 明代後期遼東經濟
 - 第十三章 明代後期建州女真社会經濟形態
 - 第十四章 明代東北城鎮及城鎮經濟
 - 第十五章 明代東北社会生活
 - 第十六章 明代東北的文化
 - 第十七章 明王朝在東北統治的瓦解（李治亭・佟錚）
- 右の如く、全一七章の中、一四章は楊陽氏自ら執筆している。まさに主編の名にふさわしいものである。而して明代東北社会史を三つの時期に分けて叙述している。第一期は洪武四年より宣徳一〇年までで、明朝が東北を統一し、社会經濟が恢復、發展、繁栄した時期である。第二期は正

統元年から正徳一六年までで、明朝の東北に対する統治が日々腐朽し、経済は衰退し、社会矛盾は尖鋭化し、東北社会が動揺した時期とする。第三期は嘉靖元年から崇禎一七年までで、明朝の東北統治が危機から瓦解に導かれ、経済は厳しい破壊に直面し、民族矛盾と階級矛盾は尖鋭化し、満族が崛起して、東北の統治が交替した時期である。本書では第一期を上篇、第二期を中篇、第三期を下篇に分けて叙述している。

各篇ともに、最初に明朝の東北政策について述べ、次に明朝統治下の遼東の経済について述べ、更に明朝の支配下におかれた女真族の社会経済を叙述している。その他、各期の特徴的問題として、第一期では東北における流人や東北の駅站についても別に章を立てている。第二期でも、明代東北の諸民族について専章を設けている。第三期では、東北の城鎮・城鎮経済や東北の文化についても別に章を立てている。この様に本書を明代東北社会史として特徴づけるための色々の工夫がなされている。

さて、第一章では洪武帝の東北統一と遼東都司（初め定遼都司）の設置を述べ、次いで遼東都司属下の二五衛と二州につき、それぞれ説明を加えている。而して遼東都司設置が広大な遼東人民に安定した社会環境を提供しただけでなく、遼東地区の経済発展を促進し、明朝の奴兒干地区へ

の招撫をも促進したとしている。最後に、近年來発掘された遼東の碑志を紹介している点は、非常に興味深い。

第二章では、明朝が東北支配を鞏固にするため、多数の流人を論戍したことを述べる。而して流人の種類を、①清軍政策によって、東北へ發遣された者、②反抗した少数民族、③刻指事に因る者、④明朝の忌諱にふれた僧人、⑤宦官の犯罪者、⑥誣告罪に因る者、⑦備禦にしくじった官兵、⑧貪贓枉法、納賄作弊等の罪に因る者、⑨⑩省略。而して流人の生活が如何に悲惨なものであったかを述べると共に、彼等の歴史的作用を論じている。

第三章では、明代初期の遼東の経済について考察する。最初に遼東都司の屯田管理の実態を解明、屯田を推行したことが、遼東農業を發展させ、また軍屯が遼東の土地占有の主要形式であったとしている。次に、遼東における冶煉業について述べ、冶鉄業の發展に随つて、採煤業も進展したことを指摘する。燒瓷、燒磚業の發展についても付言している。更に造船業の發達、吉林船廠の盛況を述べている。最後に馬市貿易に関して、詳細に論じられている。馬市貿易は東北各民族の經濟關係を強化し、これを通じ「各民族間の接触、交流が進展し、周辺各民族に対する統治が強化された」と結んでいる。

第四章では、永樂、宣徳朝の東北に対する統治強化、殊

に奴兒干都司の設立について述べている。奴兒干都司の設立と共に永寧寺も建造された。永寧寺碑の寫真を神田信夫『凶說中國の歴史』（講談社）から借用しているが、これは怠慢と言ふべきであろう。重建永寧寺碑の寫真は金毓勲『靜晤室日記』より採っている。次に、奴兒干都司の建制について述べるが、流官である筈の都指揮等の官が世襲化されていた事実を指摘する。奴兒干都司所属の各衛所の設立については一々経緯を述べて、約四〇頁に及んでいる。更に、亦失哈（海西女真出身の宦官）の奴兒干招撫を進めた事実を考察し、「永寧寺記」、「重建永寧寺記」に対して詳細な考釈を加えている。最後に、奴兒干都司所属の衛所の羈縻政策を、勅書制度、衛所の職能、朝廷のこれに対する管轄の三点から考察している。

第五章では、遼東都司、奴兒干都司に分けて、駅站の設立、管理、職能について述べているが、特に後者については「海西東水陸城站」および「海西西陸路」、「開原東陸路至朝鮮後門」、「納丹府東北陸路」の各交通路について解説している。

第六章では、明初奴兒干都司所轄の女真族の社会経済状態について論じている。第一節では野人女真、第二節では建州女真各部の経済状況を述べている。その中では、建州女真建州左衛斡朵里部についての叙述が詳細である。全体

として、社会経済状況に関する叙述は簡略である。（以上、上篇）

第七章では、海西女真の南遷、奴兒干都司所轄の衛所の増設、遼東の辺境修築について述べる。最初に扈倫四部（葉赫部、哈達部、輝發部、烏拉部）、次に奴兒干都司下の衛所の増設を述べ、最後に遼東における辺境の修築、墩堡の構築について論じている。辺境は永樂年間に修築が始まったが、主要なものは明中葉以後に築かれ、蒙古兀良哈部や女真各部の侵略を防備し、東北辺地の安定を保証するためであった。

第八章では、明代中期の遼東経済について、先ず屯田（軍屯）の崩壊と、その結果としての土地占有関係の変遷、殊に軍官、官員らの有力な者による屯田の侵奪を説明する。次に、東北における冶煉業、製塩業、焼製業（磚・瓦・甃など）および製紙業について述べるが、叙述はささる簡単なものである。

第九章では、明代中期の奴兒干都司管轄の女真各部の社会経済状態を述べる。前章では明朝支配下の遼東経済を述べたのに対し、本章では女真各部の経済の実態を叙述する。最初に、野人女真の状況を説明し、次に建州女真の建州衛、建州左衛の状況を叙述している。更に海西女真の各部の経済状況（農耕、手工業、採集狩獵）を述べるが、や

はり叙述は簡略である。

第十章では、従来の叙述とはやや形を変えて、東北民族の源流から論じている。主要な見解として、①華夏―漢民族主体説、②肅慎―満族主体説、③古朝鮮―高麗族主体説、④漢族中斷説、⑤高麗族中斷説があることを述べている。次に、明以前の東北の漢人の推移を叙述し、更に明代東北の諸民族について述べる。然し、明代東北の居民は、民族成分がきわめて複雑で、漢族も多いが、女真族、高麗族も又少くないとしている。(以上、中篇)

下篇では、満族(女真族)が興起して、東北の統治者が更替することを論じるが、第十一章では、明朝が引続き東北統治を強化し、政治危機を挽救しようとした事実を述べている。豊臣秀吉の朝鮮侵略に際して、援朝禦倭戦争に東北が深く関わったことを指摘する。

第十二章では、明代後期の遼東経済について述べているが、特に土地占有関係の転変に重点をおいている。既に、第八章で屯田の崩壊について述べたが、本章ではその崩壊が益々甚しくなり、統治階級はこの現実に対応すべく「官田」制(皇明経世文編卷一八一)を実施した。然し、それも推広は困難で、次第に私有の民田が発展した過程を、三種に分けて分析する。第一は屯軍が逃亡して荒廃した田土を「招人佃種」させたケースである。第二は遼東の大小官

員が屯田を隠占し私田化したケースである。第三は新しく開墾された民田の増加である。こうして東北の民田は増加したが、それに伴って農業生産も発展した。経済作物の栽培も多く、特に煙草がこの時期に移入されたことを指摘する。次に、舟車の製造、冶煉業の発展につれて、商品経済も大いに発展し、遼陽をはじめ広寧、開原、撫順等の商業都市も出現、内地商人(特に徽商と晋商)の活動が盛んになったことを指摘している。

第十三章では、明代後期の建州女真の社会経済形態を論じている。建州女真の内部では冶鉄業、手工業、狩猟、牧畜業等も発達したが、特に農業面に於て「拖克索」(農莊田莊の意)が明中期より出現し、一六世紀に至ってこれが普遍的存在となったことを指摘する。而して女真社会の奴隸制的生産関係が、漢人社会の影響を受けて封建的土地所有関係に転化したことを論じている。

第十四章では、第十三章で述べた商品経済の発展を承けて、東北における城鎮の発達、並びに城鎮経済の発展について述べる。先ず遼東都司の治所遼陽城の発展を説明し、次いで遼陽の都市経済の発展(造船業、冶鉄業、製紙業等)を述べ、特に武器製造のすぐれたことを指摘する。次に、蓋州、海州、復州、金州、旅順口、瀋陽、撫順、鉄嶺、開原、錦州等の諸城の修築されたことを述べて

いる。更に、奴児干都司管下の諸城の修築についても触れている。

第十五章は、本書の中でもすこぶる特色のある部分で、東北の各民族、殊に女真民族の民俗について述べている。東北地方には、明代漢族、女真族、蒙古族、朝鮮族等の多くの民族が居住しており、それぞれ独自の民俗を有していたが、その他に相互に影響しあつて生れた共通の民俗があつたことを指摘する。具体例として、女真族が漢姓に改称し、漢族風の衣服をまとい、年中行事でも漢族のそれに倣つたことを挙げてゐる。蒙古族、朝鮮族、回族なども、程度の差こそあれ、多分に漢族の民俗の影響を受けたと云う。同時に、各民族はそれぞれ独自の民俗を有しており、その差異は甚だ大きかつたことも指摘する。次に、特に建州女真人の民俗について紹介している。婚嫁については、明初、既に对偶婚を離脱して、一夫一婦制に發展していたこと、喪葬は、明初はすこぶる簡略で、水葬、樹葬、獸葬、火葬があつたことを述べ、土葬は漢族の習俗を撰取したものと云う。服飾についても女真族の特徴を述べている。住宅は明初はやや遅れたもので、「草頂土房」が多かつたが、中、後期になると、住宅營造には著しい發展があつたことを述べる。舞踏にも独自の風俗があり、騎射は彼等の長技であつたと云う。最後に、祭祀について述べる

が、建州女真是金代のシャーマニズム信仰を踏襲しており、彼等の信奉する神には、天・地・山川・星辰・観音・閻帝・祖先等があつた。なお、祭祀形式には祭祖（渥轍庫）、背灯祭があつたと云う。

第十六章では、東北の文化について述べ、最初に東北の地方志、『遼東志』および『全遼志』を紹介する。次に、遼東都司（山東都司、兵部を含む）の歴史档案（現存一〇八〇件）を紹介し、この史料が極めて高い価値を持つことを指摘する。第二節では、東北の碑志、詩詞などを紹介し、曲芸にまで及んでいる。安徽方面から伝入した「四平腔」は特に重要だとする。第三節では、先ず寺觀、古塔（衍福寺双塔、祖越寺石塔等）、牌坊（北鎮牌坊、興城牌坊等）を紹介する。次に科学技術にも及んでいる。第四節では、学校（社学、都司衛学等）について述べた後、宗教—シャーマン教、仏教、儒教、道教及其他に言及しているが、網羅的でそれほど詳細ではない。

最後の十七章では、明朝の東北統治の崩壊の過程を述べている。中篇でも既に述べられた様に、明朝の腐敗は在地の武官豪強の土地兼併を促進、その上賦税の収奪が苛酷であつた為、大量の屯軍の逃亡をもたらし、衛所官員がほしのままに屯軍の士卒を私役したので、益々彼等は窮迫して逃亡するようになった。それに加えて万曆二十七年、宦官高

准が「鉅税」徴収のため遼東へ派遣され、勝手気儘な濫徴を行なった。彼は民財を掠奪するのみでなく、官吏まで迫害したと云う。この為、東北における明朝の支配体制は著しく動揺した。この様な支配権力側の横暴が軍民の反抗闘争を引き起した。最初の反抗が屯軍の中から発生したのは当然であった。初めは「逃亡」であり、相当多くの者が海島や少数民族地区へ逃亡したが万暦年間になると、屢々兵変、民変も発生した。民変には市民、商人、農民、その他の階層の者も参加したと云う。兵変については、正徳八年八月、錦州で起った兵変を始め、嘉靖一三年、遼東巡撫呂經に抗議して起った兵変、嘉靖一八年の広寧兵変、万暦三六年の前屯衛兵変、崇禎元年の兵変について述べている。最後は努尔哈亦による後金政権の成立で結んでいる。(以下篇)

付録として、「東北社会(一四—一七世紀)大事年表」、「明代遼東都司属下二五衛和二州簡表」、「明代遼東都司属下二五衛俄漢名对照表」、「明朝奴兒干都司属下一八八衛所簡表」、「明代奴兒干都司属下一八八衛所衛所俄漢名对照表」、「俄漢地名对照表」及び「引用主要外文书籍訳名对照表」を付している。最後の外文书籍の中、日本語文献について言えば、和田清『東亜史研究 満州篇』(東洋文庫、一九五五)、園田一亀『明代建州女直史研究』(東洋文庫、一

庫、一九四八、五三)は是非挙げてはしかなかった。神田信夫『図説中の中国』も、『清帝国の盛衰』(図説中国の歴史8)に改めなければならぬ。その他、遼東の馬市については、江鳴寿雄の多数の論稿も挙げてはしかなかった。

さて、本書は明代東北社会史として編纂されたものである。明代東北史ならば、例えば李健才『明代東北』(遼寧人民出版社、一九八六)のような著書もある。主編者楊賜氏は、ただ東北の政治史だけではなく、社会経済史を意図したものである。そこで、前篇では東北における流人、東北の駅舎を採りあげると共に、遼東の経済および女真の社会経済を論じている。中篇では、遼東の経済、女真の社会経済を論じると共に、東北の諸民族について述べている。下篇でも、遼東の経済、女真の社会経済を論じると共に、東北における城鎮経済の発展を述べている。更に、東北における各民族の民俗、文化にまで論及している。殊に、民俗・風習に関しては、漢民族と東北各民族との関連性を追究し、特に建州女真の婚嫁・喪葬・服飾・住宅・舞踏・騎射・祭祀などの民俗に言及している。その上、東北の文化にもふれ、東北の文学・芸術、建築、宗教等を叙述している。斯様に本書が東北の社会経済のみならず、文化にまで筆を進めたことは、従来は多く政治史に止まっていた東北史の叙述に、新生面を切り開いたものとして評価されるべ

きであらう。東北社会史を意図した主編者楊賜氏の意欲に敬意を表したい。

本書は一応明代東北の通志として叙述されているが、単なる概説に止まらず、随処に貴重な史料や文献を引用している。例えば、遼寧省档案館蔵の『明信牌档』甲種、乙種、丙種、『王宜墓志』拓本、『王璉葬志』拓本、或いは『広祐寺園塔銘』拓本等の拓本類、更には中国第一歴史档案館蔵の档案類、吉林省档案館蔵の『東三省地輿全図』等も利用されている。又、『明代遼東档案匯編』（遼瀋書社、一九八五）も用いられている。但し、最も多く利用されているのは、『明実録』を始め、『李朝実録』、『遼東志』、『全遼志』等である。この様に、本書は通史とは云い難、すべて史料に基づいて叙述されており、多数の参考文献が引用されていることは注目すべきである。ロシア語文献が多数使用されていることも、本書の特徴であろう。それに比して、日本文の重要な文献が見落されていることは甚だ残念である。

本書中では、「女真」の語を用い、「女直」を使用していない。明代には彼等は通常「建州女直」、「野人女直」と云うように呼ばれていたわけであるから、明代東北史としては、やはり「女直」の語を用いた方が適当だったのであるまいか。全体として見た場合、明代の東北社会史の構想

を提示した本書は、きわめて興味深い著作である。

（一九九一年九月、瀋陽、遼寧人民出版社、A五判、四三七頁）

湯志鈞著

乗桴新獲——從戊戌到辛亥——

山根 幸夫

本書の著者湯志鈞氏は上海社会科学院歴史研究所の研究員で、現在華東師大、華中師大の兼任教授でもある。又、中国中日関係研究会理事、上海中日関係史研究会々長をも兼ねておられる。同氏は一九五五年、群聯出版社から『戊戌変法史論』を刊行されて以来、『戊戌変法史論叢』、『戊戌変法簡史』、『戊戌変法人物伝稿』等を次々に発表され、又『章太炎年譜長編』、『庫有為政論集』、『章太炎政論選集』、『陶成章集』等の編纂をも手がけられた。現在、中国における戊戌変法研究の第一人者である。

湯氏は一九八三年一月、国際交流基金会の招聘により